地域の森と消費者を直結

木材コーディネーター　能口　秀一さん

編集委員インタビュー

木の地産地消どう再生？

戦後大量に植林された多くの木々が活用されず過密化し、荒廃が進む日本の森林。土砂災害など環境への悪影響も懸念される中、木の地産地消の再生による健康な森づくりに取り組んでいるのが、丹波市を拠点に木材コーディネーターとして活動している能口秀一さん(45)だ。良質な立ち木と消費者とを直接つなげ、森の手入れが続けられる適正な価格で流通させることで、森を次世代に引き継ぐ仕組みを確立したいという。

（辻本一好）

―木材コーディネーターとはどんな職業ですか。

「地域の森と、地域の木で家を建てたい人とを結ぶのが仕事です。消費者には実際に森に入ってもらい、目の前にある立ち木を使って家を建てることが森づくりにつながることを実感してもらいます。こうした立ち木販売を可能にするには、製材、加工、建築など森から家づくりまでの各工程についてよく知っていて、関係する業者と緊密な連携が取れる能力が必要です」

―この仕事を始められたきっかけは。

「長年手入れされてきた森には、良質な木がたくさんあります。しかし、以前、製材会社にいた時、多くの所有者や林業家には流通が見えにくく、木の価値に見合った価格で流通させられずにいることを知りました。今、日本では海外の木材が手に入りにくくなり、パルプや合板の原料にする低価格の国産材需要が高まっています。このままでは、売り先のない良質な木も低価格材に混じって流通され、森の所有者が手入れする費用も得られなくなる。品質の高い木を育てようという価値観すらなくなると感じました」

「木の流通は、森林所有者から素材、市場、製材、加工、問屋、小売り、建築など多くの業者が関係していますが、輸入材が多くを占める時代が続く中、地域材のことが分かる人が少なくなってしまいました。地元の木で家を建てたいと思っても、どこに尋ねればうまくいくのか、分かりにくい。こうした消費者と森をつなげるには森の側に立って、良質な木の製品としての価値を伝え、コーディネートする役割が必要と思いました」

―木材のコーディネートとは。

「まず森の所有者と一緒に、立ち木一本ごとに場所や、太さ、傷、曲がっている部分などを調査し、計画的に活用していくためのデータベースを作成します。そして、住宅などの注文が入ると、森にあるほかの木の生育なども考慮して、条件に当てはまる木の中から伐採する木を施主に選んでもらいます。一番太い部分から梁（はり）や柱にする部分を切り取り、残りを屋根や下地に使うなどして無駄なく活用します。こうすることで、一般の流通から調達する場合と同じコストにすることが可能です」

―これまでの活動は。

「森づくりに意欲のある所有者が持つ多可町加美区の森林で立ち木データベースを作成し、その立ち木を使う販売システムでこれまで16軒の住宅を建てました。このほか、地域の道路工事で伐採する木を使った交流施設など二つの施設の建設をコーディネートしました。森林資源を持っている市町は多いのですが、地元産の利用率は低い。子どもや住民の循環型社会への意識を高めるために、こうした施設を地元でそれぞれ持つべきだと思います」

―文化財にも目を向けられていますね。

「文化財の改築の場合、特にいいものが必要です。日本は天然林にあったものをほとんど使い切ってしまい、外国のいい木を探して使ってきましたが、今後は手に入りにくくなります。そこで、植えてから百数十年以上たったスギやヒノキの人工林を保全していこうという動きが京都では始まっています。ここで、住宅で培ったシステムを活用して、森づくりに貢献したい」

―消費者に伝えたいことは。

「みなさん木は高いというイメージがあるようですが、実際には家の骨格となる構造材で建築費の1割ぐらいです。また、木というのは品質に幅があるものですが、それを消費者に教えてくれる人があまりいませんでした。家というのは大きな買い物。森や木のことをもっと深く知って、建てる過程を楽しんでほしい。日本は森林資源があるのに、ほかの国の木々を使っていることも考えてほしい。消費者の意識が変われば、業界も変わります。賢い消費者になってプレッシャーを与えてもらいたい」

豊かな資源　次世代に

立ち木販売システムを活用してできた住宅で語る能口秀一さん。「森と暮らしをつなぎ直したい」＝西宮市長田町4

■のぐち・しゅういち

1965年、石川県生まれ。立命館大学卒。製材会社を経て2004年、木材販売や建築設計を行う有限会社ウッズを設立し、木材コーディネーターに。09年、森林保全の啓発などを目的としたＮＰＯ法人サウンドウッズの副代表に。丹波市在住。

ひとこと

優れた循環型資源になるか、それとも災害の発生源となってしまうのか。地域の森は最も身近な環境問題だ。地域の木で地域に建てる、という当たり前の流れをつくることで、環境は変えられる。